

隨 想



九雜
感

江川守
弥

A decorative horizontal border element featuring a repeating pattern of stylized floral or geometric motifs, possibly a traditional Islamic or Mughal design.

▲若者に夢を▽
百人の生徒を学力テストで評価すれば、一番から百番までの序列はつく。しかし序列のドン尻でも清らかな真面目な気持ちで生きていく強い意欲を持たせたい。父母の愛と自然の加護により、この世に生まれたことがすでに何億倍の競争率に勝った証拠なのだ。エリートとしてこの世に生を受けたのだ。職業は何を選んでもよい。親子の信頼と心友関係を大切にして自信を持たせ、生命を大切にせよと教え、世界の社会人として公徳心をよく守らせ若者をのびのびと生かしてやりたい。創造力や情熱や勇猛心を持っている若者を信頼し、若者に託したい。心が空で外見だけに気をとられて生きては哀れだ。反対に立派に生きている若者も多

い。今年成人式に臨み若者の集団と接觸してこのように感じた。

今夏の日記

ば、一番から百番までの序列はつく。
しかし序列のドン尻でも清らかな眞面目な気持ちで生きていく強い意欲を持たせたい。父母の愛と自然の加護により、この世に生まれたことがすでに何億倍の競争率に勝った証拠なのだ。エリートとしてこの世に生を受けたのだ。職業は何を選んでもよい。親子の信頼と心友関係を大切にして自信を持たせ、生命を大切にせよと教え、世界へさわやか▽
今夏の甲子園大会で実にさわやかだったのは西東京代表の都立国立高校であつた。全国屈指の進学校でありながらよくも知體の三位一体、教育の理想を具現し強剛相手に堂々たる好試合を演じた態度に、よくやつたと心の中で嬉し泣きした人は全国で多かつた。本当にすがすがしい一コマであつた。

「どうぞ」と自分の席をその老人に譲つてあげたのです。老人は「ありがとうございます」と礼をいって、その席にかけた様子。すると、隣の席にかけていた中年の男性が、いきなり立ち上って、いま席を譲ったばかりの女性に向かって「私は男ですから、立っても平気です。どうぞおかげ下さい」と自分の席を譲った。若い女性は最初遠慮していたが、男性の強いすすめで、お礼をのべ席にかけた。

に乗せると週刊誌にすぐた。よほど痛かったもの、に何度も手をあてなでて、に謝罪の言葉は出なかつ

このやりとりを見て、満員電車の乗客は、自分がかけさせてもらつたような気がすがしいものを感じ、温かい空気が、混雑でイライラしている客の中に広がつた。温かい思いやりがどんな人の心をなごませてくれるものか

と思ひ知つた次第。私たちが、言葉を
発するとなんらかの波紋を引き起こす
が、好ましいものにしたいと思う。言
葉は影も形もないものであるが、人
口から出るときには、温かみや冷たさ
を感じさせるものである。

車中での経験。棚から荷物が落ち、としよりのヒザに当たり、思わず他人の荷物の打撃で一層痛みと不快を感じたようだ。荷物の持ち主の謝罪の言葉を当然期待し、持ち主は誰かとあたりをみている様子。やがて、三十歳位の週刊誌を読んでいた持ち主の青年が、すみませんでしたの一言もなく荷物のおきかたには落度がなかつたような素振りで、再び無造作に落ちた荷物を棚に乗せると週刊誌にすぐ目をやり始めた。よほど痛かったものとみえ、ヒザに何度も手をあてなでていたが、ついに謝罪の言葉は出なかつた。

中年の男性の目には、はつきりと無礼に対する憤りが、感じられたようだが無礼を責める言葉は発せられなかつた。いかに週刊誌に夢中とはいえ、荷物が落ち、痛いと叫び、ヒザを何度もなでていることに気がつかないはずはない。なぜ一言謝らなかつたのかと思われた。汽車は混んでいたがいいやな空気がしばらくただよつた。必要なときに、必要なことを必要なだけ、そして必要な方法で、いわなければならぬ必要の原則を感じた。